

広島西ロータリークラブ 会員のロータリー基礎研修 2

「ロータリーは『親睦』を基礎とする『自己教育運動』」

【スライド1】 ロータリアンのみなさんこんにちは。1 回目の研修では、ロータリーの奉仕概念である「一般奉仕概念」についてお伝えしました。これは、まず例会で「人に優しくする心」すなわち「奉仕の心」を養い、それをまず職場で発揮し、さらには職場以外のクラブや家庭や社会で発揮するというものです。

つまり、ロータリークラブの会員にとって、ロータリー活動の出発点は、例会で奉仕を実践するエネルギーとなる「奉仕の心」を養うところにあります。「奉仕の心」を養わなければ対外的奉仕はできないし、たとえ実践したとしても、それは他人から強要された形だけの奉仕になってしまいます。だから、ロータリークラブの会員は、この「奉仕の心」を養うための修行をしなければならないわけです。修行が必要だから、ロータリーは本質的に個々のロータリアンの「自己教育運動」だと言われます。「自己教育運動」で「奉仕の心」を養い、それを職場や社会で発揮するのがロータリーです。「Enter to learn, Go forth to serve. (入りて学び、出でて奉仕せよ)」という言葉は、ロータリー運動の本質を見事に表現した言葉であるといわれていますが、そのことを表しています。

【スライド2】 そこで、2 回目の研修では、主にこの「自己教育運動」についてお伝えしていきます。そして、「自己教育運動」の大前提となるロータリーの「親睦」についてもお伝えします。さらに、自己教育の大きなチャンスである「クラブ奉仕」についてもお話しします。

【スライド3】 皆さんの中にはロータリーが「自己教育運動」であるということを初めて聞く方もいらっしゃると思います。近年、多くのクラブにおいて会員にそれを伝えることがおろそかにされた結果ですが、そのために、多くの皆さんは、社会奉仕団体としてのロータリーしかご存じないようです。しかし、対外的奉仕は会員の「自己教育運動」の結果、自然と実践される奉仕であり、それはロータリーの一面にしか過ぎないわけで、言うまでもなくロータリーは単なる社会奉仕団体ではありません。

ではロータリーとはどのような団体かと問われると、「個々のロータリアンの自己教育運動によって奉仕する人を育てる団体」と言った方がより本質的です。

【スライド4】 1974-75年のウィリアム・ロビンズ RI 会長は、“Rotary’s first job is to build men.” 「ロータリーの第一の仕事は人を作ること」と述べていますが、まさにこのことです。彼は日本での講演で、「ロータリークラブの真価は、金銭をいくら集めたか、計画をどれだけ実践したかではなく、そのクラブがどんなロータリアンを育てたか、に尽きる。金品を社会に寄贈して奉仕するのは、ロータリーの本義ではない。奉仕する人を育成して社会に寄贈するのがロータリーである」とも述べています。まるで、松下村塾に学んだ志士たちが明治維新の立役者になったことを連想させます。

70年代のRI会長はこのようなロータリーの本質をしっかりとメッセージとして発信していましたが、前回の研修でお伝えしたように、1980年頃からRIは自らが主導する対外的奉仕の邪魔になるために「一般奉仕概念」について言及しなくなりました。その結果、「自己教育運動」であるというロータリーの本質を知らず、ロータリーを単なる奉仕団体だと誤解し、ロータリーならではの奉仕概念を理解する努力を放棄し、RIの要請に従うだけのた

ロータリークラブの会員が次第に増えていきました。

【スライド5】この状況を、有名なロータリー研究家の小堀憲助氏はその著書の中で、このように述べています。

「現在日本のロータリーにおいて発生しつつある大混乱は、ロータリーが個人奉仕を中心とする社交団体であり、この団体の支えの上に RI の組織があり、従って、ロータリーの理論の探求および開発は、第一次的に各ロータリアンにあることを忘れ、各ロータリアンと各ロータリークラブがこのような理論構造についての探求を怠り、あたかも RI の忠実な僕（しもべ）たるガバナーの下僕として奉仕のプログラムを強要されるところにある。」

皆さん、RI は「偉い」と思っていませんか？ RI からの依頼事項は絶対で、必ず守らなければならないと思っていませんか？ それは大きな間違いです。それなのにまるでガバナーの家来のように奉仕を強要されるのは、RI の依頼に強制力はなく、RI に対して自治権を有するクラブとその会員はできる限りの協力をするだけでいいのだということを知らないからです。クラブはこのようなロータリー情報を会員にしっかり伝達していく責任を持っていますが、同時にその会員は、ロータリー運動という、自らを職業人として、人間として向上させるための「自己教育運動」に真剣に取り組まなければなりません。

【スライド6】では、ロータリーの「自己教育運動」とはどのようなものでしょうか。

各会員が取り組むべきロータリーの「自己教育運動」は、主として、例会を始めとする他のロータリアンとの交流の中で行われます。米山梅吉も、「ロータリーの例会は人生の道場だ」と述べています。ロータリーは例会出席を非常に重視します。例会に出席するとプログラム出席委員会による出席率の報告がありますが、会員の 100% が出席している場合に皆が拍手して賞賛するのは、それだけ例会出席が重要だからです。なぜ例会出席がそれほど大事なのでしょう。それは、例会は主要な「自己教育」の場だからです。

私たちが身を置く一般社会には、様々な上下関係、経済力の差、年齢の差、ジェンダーの差、主義主張の相違などが存在します。しかし、ロータリアン同士はみな平等であり、平等な仲間として接することが重んじられます。例会はそのような平等なロータリアンが集う場所です。従って、例会には、一般社会に存在する様々な「不平等」を決して持ち込まず、平等な仲間として接することが要求されます。

しかし、これは非常に難しいことです。平等思想は今では当たり前であると考えられますが、実は人類は長い間、平等ではない縦社会の中で生きてきました。特に、インドなど中近東諸国、東南アジア諸国においては、厳しい階級制度なり男尊女卑思想があり、日本においても長い間の封建制度の影響で、今なお封建的な考えが蔓延しています。そして、これは無意識に日常生活に現れます。たとえば、ドラマなどを見ると医者は看護師を馬鹿にしていますし、大会社の社長は平社員の内容を無視しているかのように行動します。これらが無意識に発揮されるのが一般社会の現実です。このような一般社会からロータリーの例会を切り離して、たとえば、それまで地元の大企業の社長として接してきた方、あるいは、他の組織では後輩にあたる方に、例会で出会った時は平等な仲間として接する、というのは、なかなか難しく不自然に感じることもかもしれません。

だからこそ、例会は「自己教育」の場になるのです。一般社会の上下関係を忘れ、仲間として気軽に「こんにちは！」と笑顔で気軽に声を掛ける。また、決して先輩面をしない。そういうことができる自分になれるよう、自分自身を訓練するのが例会なのです。

【スライド7】ここで注意が必要なのは、ロータリーに存在する平等の精神は自分を律するものではあっても、他人を罰する法律ではないということです。たとえ平等な言動がとれない会員がいても、その会員を罰することはできません。

たとえば、あなたが例会で、ある会員に「こんにちは！」と微笑んで挨拶したとき、その会員があなたに目も合わさず「こんにちは」と小さく答えたとしましょう。おそらく多くの人はいくらもこういう扱いを受けたらイヤな思いになるでしょう。一般社会なら、「なんだその態度は！」となることもあるでしょうが、ロータリーの例会では「機嫌が悪かったのだろう」と流せる自分になれるよう自己教育を行うのです。

まず自分が相手に対して平等に接することができるようになる、そして次に、他人がそうでないときでも受け入れられる自分になる、これがロータリーが例会であなたに施す「自己教育」です。この結果、ロータリアンの心には、人に優しくする、すなわち「奉仕の心」が育つのです。

この「自己教育」によって他の会員を仲間として平等に付き合える自分になれば、不平等が蔓延する一般社会においても、あなたはロータリアンに対してと同じように平等に振る舞えるはずです。

【スライド8】日本ではロータリアンの構成を見ると地元のいわゆる上流階級と思われるような方が多いため、ロータリアンではない社会一般の人に対して意味のない優越感を持って接する傾向があるようです。たとえば、ロータリーではどの職業も等しく尊重すべきであるとされているにもかかわらず、職業によって上下の差を付けがちです。しかし、例会で「自己教育」を行い、人に優しくするという「奉仕の心」を持ったロータリアンであれば、そのような一般社会の現実からのがれ、誰に対しても平等に振る舞えるはずです。街を歩いているときに困っている老人がいたら声を掛ける。飲食店では「ごちそうさま」と挨拶する。電車やバス、タクシーに乗ったら、降車するときに「ありがとう」と微笑む。家族に優しくする。このように、ロータリアンではない全ての人に対しても、決して優越的な地位をもつものではないと自覚し、平等に振る舞うことができるはずですし、これがなければロータリーの奉仕は実践できません。

このような「自己教育運動」は、ロータリーの奉仕を実践するための、「奉仕の心」というエネルギーを生み出すのですが、同時に、ロータリアンの職業人としての、あるいは人間としての成長に繋がることを忘れてはなりません。ロータリーの例会で「自己教育」を行い、人に優しくする心を養う。それを職場や社会で発揮する。これができるようになると、ロータリアンには一種オーラのようなものが出現し、「やはりロータリアンは違う」というような、尊敬の念を抱かれるようになると言われていています。確かに、見かけが「素敵だ」ロータリアンに時々お会いすることがあります。だからロータリーはロータリアンのためになるのです。もしあなたがそうでないとしたら、鏡の前に立ったとき自分が「素敵だ」と思えなかったら、残念ながら「自己教育」が足りないことが原因だと言えます。

【スライド9】さて、ここまで、ロータリーは自らを平等の精神で律する「自己教育運動」であるとお伝えしてきましたが、この話をすると、「それではロータリーはまるで宗教だな」という方がいらっしゃいます。ロータリーは宗教か？ 答えは「ノー」です。そこで、ロータリーと宗教の違いについてお話しします。

「一般奉仕概念」の生みの親であるシェルドンは、ロータリーの奉仕は職業人が永続的に成功するための奉仕であると解きましたが、これは「実業倫理主義」と言います。ポール・ハリスも一貫して「実業倫理主義」を支持しています。この「実業倫理主義」においては、儲けるという職業人として当たり前の行為に、いかにして「利他」

という要素を取り入れるか、つまり、「利己」と「利他」の調和をどうやって図っていくかを考えます。調和を図りますが、実は「利他」の前に「利己」があり、「利己」は決して悪いことではないと考えるのが、ロータリーの考え方です。

【スライド10】これに対して宗教は、まずは自我を放棄して、更に他人に尽くすことが神への奉仕だと考えます。つまり、「利己」を否定し、「利他」のみが重視されています。

このように、「利己」を肯定するロータリーは、「利己」を否定する宗教とは全く異なるものと言えます。

ロータリーの標語であるシェルドンの“*He profits most who serves his fellows best.*”最もよく奉仕するもの最もよく報われる、と並んでもう一つのロータリーの標語は、“*Service above self*”、超我の奉仕、ですが、もともと“*Service, not self*”、であり、「利己」を否定するような表現でした。しかし、ロータリーは「利己」と「利他」の調和を図ろうとする「実業倫理主義」であり、決して「利己」を否定するものではないことから、後に“*Service above self*”に変えられました。

【スライド11】さて、ここから話を「親睦」に移します。ロータリーの用語は、言葉は同じでも一般社会とは意味が全く違うものが多く存在します。たとえば、「奉仕」は、原語は「サービス」ですが、これを「奉仕」と訳すと、滅私奉公のようなニュアンスが加わってしまいます。しかしロータリーは「利己」を認めていますから、「サービス」は一般社会でいう奉仕とは少し意味が異なるわけで、これがロータリーの奉仕を理解する上で大きな誤解を生む元になっています。別の例を紹介しますと、「社会奉仕」という言葉も一般社会のそれとロータリーでは意味が異なります。原語は「コミュニティサービス」です。決議23-34の題名にも、この「コミュニティサービス」という言葉が使われていますが、この決議がロータリーの奉仕全般、つまり、社会奉仕だけでなく、職業奉仕など全ての奉仕を含んだロータリーの奉仕を規定しているにもかかわらず、日本語に訳すときに「社会奉仕」と訳したため、この決議がまるで社会奉仕だけに関する決議であるかのような誤解を生んでいます。

「親睦」という言葉も、一般の「親睦」とロータリーの「親睦」は大きく意味が異なります。「親睦」の原語は「フェロシップ」です。国際大会で設営される「ハウス オブ フェロシップ」を「友愛の広場」と訳していますし、このフェロシップは親睦ではなく「友愛」と訳す方がわかりやすいのではないかと思います。一般社会で言う親睦に該当する英語はフレンドシップですが、フェロシップの精神を元にフレンドシップを行うという関係にあると考えられますから、フェロシップはフレンドシップを可能にする精神のことで、より上位の概念だと言えます。つまり、ロータリーの親睦は一般社会の親睦より上位の概念なのです。

【スライド12】ロータリーの「親睦」は、ここまでお伝えした「自己教育運動」の基礎となるもので、ロータリーの「親睦」は、「相手に何も求めず相手のためになろうとすること」です。やはりこれは、「親睦」と言うより「友愛」あるいは「友愛の心」と言った方が適切のように思います。この親睦の精神に支えられたロータリアン同士の交流から「奉仕の心」が生まれ、それが対外的奉仕のエネルギーになり、「奉仕の実践」に繋がります。親睦から生まれた「奉仕の心」はさらに強い親睦を生み、それが更に強い奉仕の心に繋がる。この自転作用がロータリーの奉仕概念を支えています。

ロータリーには親睦のためにゴルフや麻雀など様々な同好会が存在しますが、ゴルフを楽しむことを目的としてゴルフをしたり、麻雀を楽しむことを目的として麻雀をするのであれば、それは一般社会の親睦と変わりありま

せん。ロータリーの親睦はそのようなただのフレンドシップではなく、それを可能にする心のこと、すなわちフェロシップ、友愛のことですから、ロータリーでは、ゴルフも麻雀も、相手に何も求めず相手のためになろうとする「友愛の心」を発揮して、「奉仕の心」を強化していくのだという意識をもって行うことが大切ではないでしょうか。

【スライド13】簡単に言うところのことです。ロータリーは「奉仕の心」を養う「自己教育運動」ですが、自己教育を余り厳格に追求すれば、笑いがなく殺伐とした世界になってしまいます。かといって、一般社会的な親睦によって楽しくやることだけになれば、ロータリーは墮落一方となってその目的を達することができません。だから、両方を重視して、あくまで「人に優しくする」という「奉仕の心」を養うという目的を持ったロータリーの「親睦」を楽しみながら「自己教育」を行うことにしているのです。

「ロータリーは親睦に始まり親睦に終わる」という言葉がありますが、これはロータリーの親睦の意味を良く理解していない非常に誤解を招く無責任な表現です。もしそうなら、ロータリーは親睦だけで繋がった団体であればいいのかと言うことになります。もちろんそうではなく、ロータリーはそんな薄っぺらい組織ではありません。

【スライド14】もう一つ、数年前に「ロータリーの友」でも漫画で紹介されたガイ・ガンディカーは、著書「ロータリー通解」の中でこのように述べています。

「しばしば、ロータリーで親睦を図ることが、ロータリー運動の全てであるように誤解される。また、ゆらぎない親睦こそ、ロータリーが存続する絶対的条件だと考えているクラブもある。しかし、これらの二つの立場からの判断には、明らかに批判の余地がある。親睦はロータリー運動そのものではなく、ロータリーという植物が根をはり、成長するためにどうしても必要な、最上の土壌に過ぎないのである。」

皆さん、是非、一般社会の親睦とロータリーの親睦の違いをしっかりとご理解いただき、「自己教育」とロータリーの「親睦」を両輪として「奉仕の心」を育てていきましょう。

最後に、「クラブ奉仕」についてお話しします。

これまでお伝えした「一般奉仕概念」は、まず例会で「人に優しくする心」すなわち「奉仕の心」を養い、それをまず「職業奉仕」として職場で発揮し、さらには職場以外のクラブや家庭や社会で「社会奉仕」として発揮するというものです。「社会奉仕」からは「国際奉仕」と「青少年奉仕」が派生しました。あれ？ 五大奉仕部門の残りの一つ「クラブ奉仕」はどこに行ったのでしょうか。

【スライド15】クラブ奉仕は、一般奉仕概念の中にしっかり組み込まれています。これは前回の研修でお見せした図ですが、ご覧の通りクラブ奉仕は一般奉仕の一部です。

【スライド16】では、クラブ奉仕とは何なのか。ロータリークラブでは、クラブ会長がロータリー運動の一指導者としてクラブの管理運営に当たりますが、当然ながら一人では何もできません。そこで、幹事に管理運営の実質的な権限を与え、委員会で構成される組織を作って、そこには全ての会員が組み込まれ、その全ての会員が会長を補佐しながら管理運営を行っていきます。その管理運営を、皆が平等であるという精神の下で、他の奉仕と同じように、全ての会員が「人に優しくする心」をもって行うのがクラブ奉仕です。

実は、このクラブ奉仕は、今日のテーマである「自己教育運動」に大きく関わっています。定款によりますと、クラブ奉仕とは、「本クラブの機能を充実させるために、クラブ内で会員が取るべき行動に関わるもの」です。要するに、会員が、クラブの改善と発展という共通目標の下で、クラブの管理運営のために与えられた役割を果たすことを言います。

【スライド17】大切なことは、我々が日頃仕事をしている企業などの組織で行われる事務作業と、クラブ奉仕は全く異なるということです。事務作業とは、「効率」を最重視し、上下関係を軸とした「処理」です。しかし、クラブ奉仕は単なる「処理」ではありません。まず、その根底には、「どうすればクラブがもっと良くなるのか、将来発展するのか」という目的意識が必要です。また、関わる会員の全てが平等であり、従って全員が等しく参加して事を進めることが必要です。「効率」を重視して委員長一人で進めるのは大きな間違いであるし、社会的に上下関係がある他の会員に対して「やっつけよ」などと押しつけるのは言語道断。現代社会では、ある程度の事務局への仕事の依頼は避けられませんが、極論すれば、クラブ奉仕は会員が汗水垂らして行うもので、「効率」を求めて何でもかんでも事務局に投げるのは、これはクラブ奉仕にはならないのです。

【スライド18】このように、一般社会の効率重視の「処理」ではなく、クラブの改善発展を目的とした会員の手によるクラブの管理運営がクラブ奉仕であり、クラブ内でこのようなクラブ奉仕を実践することは、実は会員に与えられた大きな「自己教育」のチャンスなのです。

繰り返しますが、クラブで与えられた仕事をこなすのは、一般社会の事務処理とは次元が異なります。このことをしっかり自覚していただき、クラブの改善発展のためになることであれば、是非時間と労力を惜しまずに取り組んでいただきたいものです。それが「自己教育」となり、取り組めば取り組むほど、自分自身の成長に繋がります。

【スライド19】以上、2回目の研修として、ロータリーは「親睦」を基礎とする「自己教育運動」であるということ、そして、自己教育の大きな機会である「クラブ奉仕」についてもお伝えしました。1回目と2回目で、ロータリーの「一般奉仕概念」と、その前提となる「自己教育」についてお伝えしましたが、ここまでの、RIを含め現在のロータリー社会で伝承努力が失われつつあるため非常にわかりにくくなっている部分です。しかし、これがロータリーの全てであるといっても過言ではないほど、100年を超えるロータリーの歴史を受け継ぐロータリアンにとっては非常に重要なことなのです。

ロータリアンの研修としては、これ以外にも知っておくべき内容があります。たとえば、ロータリークラブの管理運営に関しては、定款や細則、理事役員や委員長の役割、それから、五大奉仕のそれぞれについてなどがあるでしょう。しかし、この研修の1回目と2回目でお伝えした以外の知識はロータリーの入門書などを見れば記載されています。また、定款や細則、理事役員や委員長の役割については、別に実施する理事研修や委員長研修でお伝えします。どうか、この研修にとどまらず、引き続きロータリアンとしての自己研鑽をお願いいたします。

それでは、皆さんが、一般社会の親睦とは次元が違うロータリーの親睦の意味をご理解され、そして実践され、「自己教育」に励まれることによって、全ての奉仕のエネルギーとなる「奉仕の心」を養われ、オーラ漂うロータリアンになられることを祈って終了いたします。